

放課後の過ごし方と1年間の過ごし方からみる「文化の格差」の問題

西島 央 (首都大学東京准教授)

【要旨】

- ①放課後の習い事・学習塾・部活動・アルバイトなどの「かけもちパターン」(かけもち数)と、長期休暇や週末などに経験する活動や行事などの「1年間行事数」は、「親学歴」が高いほど多い傾向がある。
- ②「1年間行事数」の「少ない」割合が非常に高い「かけもちパターン」は、すべてしていないパターン、次いで、部活動だけしているパターンである。
- ③「親学歴」が低い場合、「1年間行事数」が多いほど「希望進学段階」が高くなる傾向がある。

1. はじめに

～「文化の格差」への注目

小学校低学年のころ、私は、ピアノ教室、絵画教室、体操教室などと、いくつもの習い事に通っていた。ピアノを習っていることは、当時の男子にとっては恥ずかしいことだったのか、できるだけ内緒にしていた一方、クラスの友だちの多くが通っているそろばん教室や習字教室、そして学習塾に、自分も通いたいなあと思ったことが何度もあった。

高学年になって、週末の進学教室に通って中学受験を目指すようになるにつれて、習い事は次々とやめていった。クラスの友だちと放課後遊ぶこともない勉強漬けの毎日を経て、やっとの思いで私立中学校に入学してみると、少なからぬ同級生が小学校以来習い事を続けている。それもピアノではなくバイオリンを弾いたりしていることに驚かされた。

中学校では、部活動に熱心な友だちもいれば、授業が終わるとそそくさと帰って行き、

どうやら塾に通っているらしい友だちや、放課後何をするわけでもなく、学校に残って遊んでいる友だちもいた。

そして、今。中学校でバイオリンを弾いていた友だちは、仕事とは別にバイオリンをアマチュアオケで弾いているし、ピアノは途中でやめたものの、部活動でサッカーを始めた私は、音楽教育や部活動に関する研究を仕事にし、週末にはコンサートに行ったりサッカーをしたりしている。

ここ数年、教育のさまざまな場面でも「格差」が問題となっている。その際、一般的には、学力、進路、意欲の格差と、その背景にある家庭の経済的な格差が問題とされる。しかし、上述の経験をふまえると、習い事などの趣味的な活動経験の差、つまり「文化の格差」もまた、子どもの将来を規定する重要な要因となるのではないだろうか。

「文化の格差」は、次の2つの次元で生じうる。第一に、毎日の放課後の過ごし方であ

る。放課後には、習い事や学習塾に行ったり、中学生なら部活動をしたり、高校生ならアルバイトをしたりできるが、あれもこれもする人もいれば、どれか1つだけをしたり、何もなかったりと、かけもちのパターンは多様にありうる。第二に、1年間の余暇時間の過ごし方である。長期休暇や週末などに、旅行に行ったり、映画を観に行ったり、家族で季節の行事をしたりすることがあるが、それらも、あれこれする人もいれば、あまりしない人もいるだろう。

そこで、本章では、毎日の放課後の過ごし方に関する「かけもちパターン」と、1年間の余暇時間の過ごし方に関する「1年間行事数」について、家庭の影響や、成績や希望進学段階などとの関係を検証し、「文化の格差」の問題について考察することにしたい。

2. 放課後の過ごし方

～「かけもちパターン」とその背景

毎日の放課後の過ごし方に関して、小学生、中学生、高校生は、それぞれどのような「かけもちパターン」になっているのだろうか。本節では、学校段階ごとの「かけもちパターン」とその背景について検討していく。

2-1 小学生、中学生、高校生の

「かけもちパターン」

学校に通うことは同じでも、放課後の過ごし方は、小学生、中学生、高校生でずいぶん違っている。小学生ならおもに習い事と学習塾だが、中学生になれば部活動が、高校生ならさらにアルバイトが加わってくる。習い事、学習塾、部活動、アルバイトのそれぞれについては、別の項目（学年別についてはP16の図1-1を、学校段階別については巻末基礎集計表を参照）で学校段階別の実施状況を紹介しているので、ここではそれらのかけもちのようすをみていくことにしよう。

小学生の習い事と学習塾の「かけもちパターン」は、図2-1のように、もっとも多いの

は習い事のみをしている「習い事○学習塾×」の50.8%で、習い事をして学習塾にも行っている「習い事○学習塾○」は29.0%である。一方、どちらにも行っていない「習い事×学習塾×」は13.0%だった。

中学生の習い事、学習塾、部活動の「かけもちパターン」は、調査時点で3年生が部活動を引退している場合があるので、1・2年生と3年生に分けて作成した。

図2-2のように、中1・2生でもっとも多いのは、「習い事×学習塾×部活動○」、つまり部活動のみをしているパターンの30.9%である。すべてしている「習い事○学習塾○部活動○」は18.1%で、すべてしていない「習い事×学習塾×部活動×」は2.6%にすぎない。中3生では、図2-3のように、もっとも多いのは「習い事×学習塾○部活動×」、つまり学習塾にだけ行っているパターンの32.0%である。中1・2生でもっとも多かった「習い事×学習塾×部活動○」は8.9%に激減する一方、すべてしていない「習い事×学習塾×部活動×」は18.2%に増加している。このように、中1・2生と、高校受験を控えた中3生では、同じ中学生でも放課後の過ごし方が大きく違っているのだ。

高校生の習い事、学習塾、部活動、アルバイトの「かけもちパターン」は全部で16通りあるが、該当人数の少ないパターンは省略し、おもだった5つのパターンだけを検討しよう。

図2-4のように、もっとも多いのは「習い事×学習塾×部活動○アルバイト×」、つまり部活動だけしているパターンの51.3%である。一方で、アルバイトだけしている「習い事×学習塾×部活動×アルバイト○」が7.0%、すべてしていない「習い事×学習塾×部活動×アルバイト×」が17.1%もいて、高校生の放課後は学校中心か学校外中心かに二分するようすがうかがえる。

2-2 小学生、中学生の

「かけもちパターン」の背景

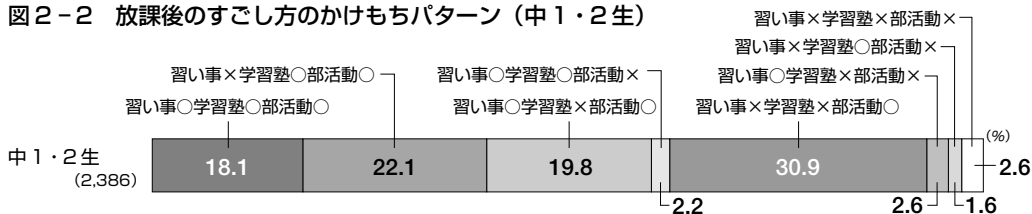
なぜ放課後の過ごし方は多様な「かけもち

図2-1 放課後の過ごし方のかけもちパターン（小学生）



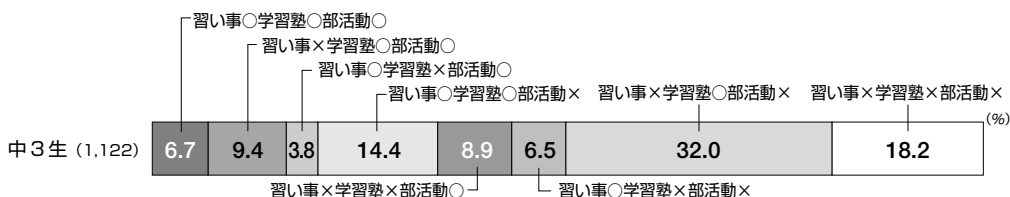
注1) 習い事または学習塾の設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-2 放課後の過ごし方のかけもちパターン（中1・2生）



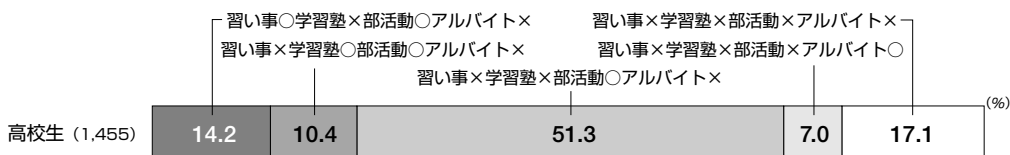
注1) 習い事、学習塾、部活動のいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-3 放課後の過ごし方のかけもちパターン（中3生）



注1) 習い事、学習塾、部活動のいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-4 放課後の過ごし方のかけもちパターン（高校生）



注1) 習い事、学習塾、部活動、アルバイトのいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2) 高校生の「かけもちパターン」は全16パターンだが、ケース数が非常に少ない11パターンは分析から除いた。
 注3) ()内はサンプル数。

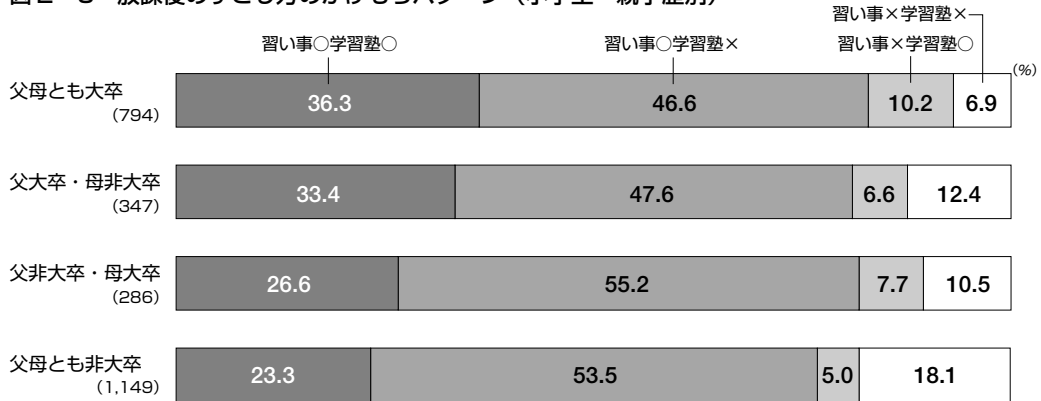
パターン」に分かれるのだろうか。教育の格差の問題では、家庭環境の違いが指摘されることが多い。とくに小・中学生なら、習い事や学習塾に通うかどうかは保護者の判断によるところが大きいだろう。そこでここでも、家庭環境の違いに注目してみたい。家庭環境については保護者の最終学歴をたずねた設問があるので、それを用いて小・中学生の「かけもちパターン」を「親学歴」別にみていこう。

図2-5は小学生の、図2-6は中1・2生の「かけもちパターン」を「親学歴」別にま

とめたものである。まず小学生からみてみよう。「習い事○学習塾○」では、「父母とも大卒」が36.3%なのに対して「父母とも非大卒」では23.3%にとどまる。一方、「習い事×学習塾×」では、「父母とも大卒」は6.9%しかいないのに対して「父母とも非大卒」では18.1%もいる。

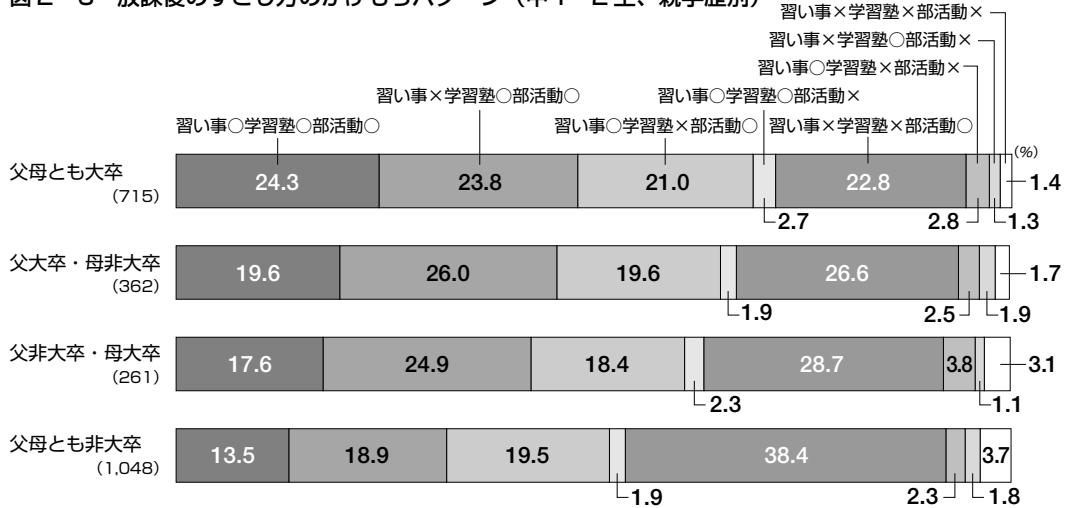
次に中1・2生をみてみよう。「習い事○学習塾○部活動○」では、「父母とも大卒」が24.3%なのに対して「父母とも非大卒」では13.5%にとどまる。一方、逆の傾向をみせる

図2-5 放課後の過ごし方のかけもちパターン（小学生・親学歴別）



注1) 父親、母親のそれぞれについて、大学や短期大学を卒業している場合を「大卒」、そうでない場合を「非大卒」とした。
 注2) 習い事または学習塾の設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注3) () 内はサンプル数。

図2-6 放課後の過ごし方のかけもちパターン（中1・2生、親学歴別）



注1) 父親、母親のそれぞれについて、大学や短期大学を卒業している場合を「大卒」、そうでない場合を「非大卒」とした。
 注2) 習い事、学習塾、部活動のいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注3) () 内はサンプル数。

のは「習い事×学習塾×部活動○」で、「父母とも大卒」は22.8%だが「父母とも非大卒」では38.4%にもものぼる。

小・中学生を問わず、「親学歴」が高いほど「かけもちパターン」のかけもち数が多い傾向がみられること、中1・2生では、部活動のみしているパターンが「父母とも非大卒」で他の「親学歴」よりも目立って多いというように、「かけもちパターン」には「親学歴」が影響しているのである。

また、小学生の「学習塾」に関しては、中

学受験の影響を受けている可能性がある。そこで人口規模別にみたところ、図表にはまともていないが、「特別区・指定都市」では他の人口規模の地域よりも、「習い事○学習塾○」が5.7~14.7ポイント、「習い事×学習塾○」が3.1~5.6ポイント多く、「習い事○学習塾×」が6.8~13.0ポイント少なかった。小学生の「かけもちパターン」には、中学受験に起因すると考えられる地域差も影響しているといえよう。

2-3 小学生、高校生の「かけもちパターン」の他の生活時間への影響

放課後に習い事や学習塾に行ったり、部活動やアルバイトをしたりすることは、さまざまな経験を積めることにもつながるが、他の生活時間に影響を及ぼすことにもなる。では、「かけもちパターン」別では帰宅後の家での時間の過ごし方にどのような違いがあるだろうか。「かけもちパターン」がはっきりと分かれる小学生と高校生の「家庭学習時間」（「学校の宿題をする」＋「学校の宿題以外の勉強をする」時間）と「テレビ・DVD視聴時間」（「テレビやDVDを見る」時間）についてみてみよう。

表2-1は小学生の、表2-2は高校生の、「かけもちパターン」別にみた「平均家庭学習時間」と「平均テレビ・DVD視聴時間」である。まず小学生からみてみよう。「平均家庭学習時間」は、「習い事×学習塾○」が121.2分と突出して長い一方、「習い事○学習塾×」と「習い事×学習塾×」の、つまり学習塾に

通っていない小学生は50分台にとどまっており、通塾の有無に加えて家庭学習時間でも約1時間の勉強時間の差が生じている。「平均テレビ・DVD視聴時間」は、反対に「習い事×学習塾×」が128.6分でもっとも長く、「習い事×学習塾○」が83.4分でもっとも短い。

高校生の「平均家庭学習時間」の差はもっと顕著である。つまり、「習い事×学習塾○部活動○アルバイト×」は111.1分勉強しているが、「習い事×学習塾×部活動×アルバイト○」はわずかに31.9分と、およそ80分もの差がある。「平均テレビ・DVD視聴時間」は、「習い事×学習塾×部活動×アルバイト×」の128.8分がもっとも長く、「習い事×学習塾○部活動○アルバイト×」の75.3分がもっとも短い。

このように、「かけもちパターン」によって帰宅後の家での時間の過ごし方にも違いがみられる。「かけもちパターン」の違いは、放課後の経験に加えて家庭での経験にも違いをもたらしているのである。

表2-1 平均家庭学習時間、平均テレビ・DVD視聴時間（小学生・かけもちパターン別）

	(分)	
	平均家庭学習時間	平均テレビ・DVD視聴時間
習い事○学習塾○	87.5	95.5
習い事○学習塾×	58.5	111.7
習い事×学習塾○	121.2	83.4
習い事×学習塾×	57.5	128.6
平均	71.3	107.2
サンプル数	2,533	2,560

注) 平均家庭学習時間、平均テレビ・DVD視聴時間は、無回答・不明を除いて算出した。

表2-2 平均家庭学習時間、平均テレビ・DVD視聴時間（高校生・かけもちパターン別）

	(分)	
	平均家庭学習時間	平均テレビ・DVD視聴時間
習い事○学習塾×部活動○アルバイト×	78.3	91.2
習い事×学習塾○部活動○アルバイト×	111.1	75.3
習い事×学習塾×部活動○アルバイト×	71.1	87.0
習い事×学習塾×部活動×アルバイト○	31.9	123.2
習い事×学習塾×部活動×アルバイト×	74.4	128.8
平均	74.2	96.0
サンプル数	1,427	1,445

注) 平均家庭学習時間、平均テレビ・DVD視聴時間は、無回答・不明を除いて算出した。

3. 1年間の過ごし方 ～「1年間行事数」とその背景

1年間の過ごし方に関して、小学生、中学生、高校生は、それぞれどのような活動や行事を経験しているのだろうか。本節では、学校段階ごとの「1年間行事数」とその背景について検討していく。

3-1 項目別にみた1年間の活動や行事

長期休暇や週末などに経験する活動や行事について、「あなたは、1年間に、次のことを何日くらいしますか」と11項目をあげてたずねた。図2-7は、項目ごとの結果を学校段階別にまとめたものである。高校受験を控えた中3生は、中1・2生とは異なる過ごし方をしていると考えられるので、中1・2生と中3生に分けてまとめた。

全体の傾向として、経験頻度が高かったものは「家で季節の行事をする（クリスマス、節分など）」で、小学生では72.5%が、高校生でも53.7%が、1年間に3日以上している。次いで高いのは「映画館に映画を観に行く」で、学校段階を問わず40%台が1年間に3日以上している。以下、「地域の行事に参加する（夏祭りなど）」「お墓参りをする」「家族で旅行に行く」と続いていて、ここまではどの学校段階でも1年間に1日以上する割合が50%を超えている。「スポーツを観に行く」以下は、「ほとんどしない」が半数を超えており、経験頻度が低いのが「コンサートやライブに行く」「キャンプに行く」「美術館や博物館に行く」である。

学校段階別の特徴をみると、学校段階が上がるにつれて経験頻度が減るのは、「家で季節の行事をする（クリスマス、節分など）」「地域の行事に参加する（夏祭りなど）」「家族で旅行に行く」「動物園や水族館に行く」「美術館や博物館に行く」「キャンプに行く」で、経験頻度が増えるのは「コンサートやライブに行く」である。また、中1・2生から中3生

にかけて多くの活動や行事で減少傾向がみられる一方、「ボランティア活動に参加する」では中3生だけ頻度が増えており、高校受験がこういった活動や行事にも影響しているようすがうかがえる。

3-2 「1年間行事数」

では、小・中・高校生はどれだけ多様な活動や行事を経験しているのだろうか。11項目を経験の有無だけに分け直して経験数の総和を求め、0～4項目を「少ない」、5～7項目を「ふつう」、8～11項目を「多い」の3つに分類した。なお、高校受験の影響があるため、中3生は分析から除いた。

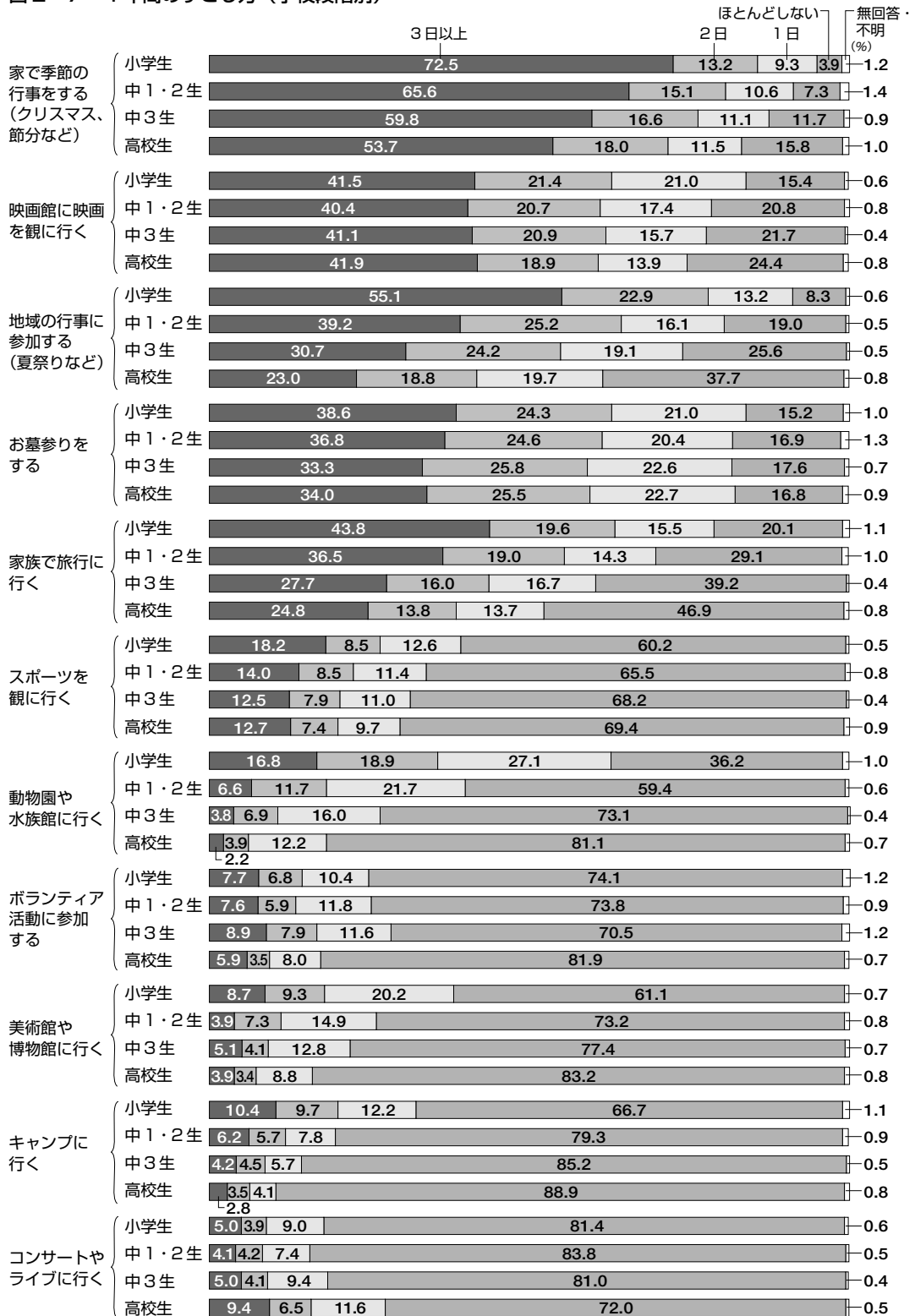
3分類した「1年間行事数」を学校段階別にまとめたのが図2-8である。「多い」は小学生の30.6%から高校生の8.1%まで学校段階が上がるにつれて減っていき、逆に「少ない」は小学生の13.6%から高校生の44.9%まで増えている。学校段階が上がるにつれて、経験する活動や行事のバリエーションは少なくなっていくのである。

3-3 「1年間行事数」の背景

なぜ子どもの1年間の過ごし方は多様な「1年間行事数」に分布するのだろうか。ここでも家庭環境の違いに注目してみよう。

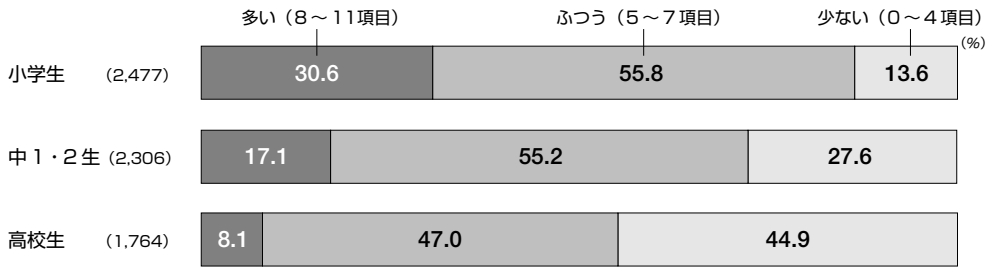
表2-3は、学校段階ごとに、「1年間行事数」の「多い」比率のみを取り出して「親学歴」別に示したものである。小学生では、「父母とも非大卒」の24.8%に対して「父母とも大卒」が38.5%、中1・2生でも「父母とも非大卒」の13.0%に対して「父母とも大卒」が24.0%と、「親学歴」が高いほど経験する「1年間行事数」は多い。高校生では、「親学歴」による差（「父母とも大卒」－「父母とも非大卒」）はおよそ6ポイントにとどまり、他の学校段階よりはずっと小さくなる。これは、ユースカルチャーの影響で、高校生自身の判断で活動や行動をしたりしなかったりようになるからだろう。

図2-7 1年間のすごし方（学校段階別）



注1) サンプル数は、小学生2,603名、中1・2生2,426名、中3生1,166名、高校生1,822名。
 注2) 「3日以上」は、「3～4日」+「5～9日」+「10日以上」の%。

図2-8 1年間行事数（学校段階別）



注1) 1年間行事数の3分類は、1年間にどんな行事を何日くらいするかをたずねた設問で、計11項目を経験の有無で分けて経験数の総和を求め、その数により分類した。

注2) ()内はサンプル数。

表2-3 1年間行事数が「多い」割合（学校段階別・親学歴別）

	父母とも大卒	父大卒・母非大卒	母大卒・父非大卒	父母とも非大卒
小学生 (2,477)	38.5	31.4	30.3	24.8
中1・2生 (2,306)	24.0	17.2	14.7	13.0
高校生 (1,764)	11.0	9.5	10.2	5.2

注1) 1年間行事数の3分類のうち「多い」(8~11項目)の割合を示した。

注2) 父親、母親のそれぞれについて、大学や短期大学を卒業している場合を「大卒」、そうでない場合を「非大卒」とした。

注3) ()内はサンプル数。

4. 放課後の過ごし方と1年間の過ごし方の関係

これまでの検討で、放課後の過ごし方と1年間の過ごし方には、どちらも家庭環境の影響がみられることがわかった。では、放課後の過ごし方と1年間の過ごし方には何らかの関係があるのだろうか。本節では両者の関係について検討していく。「かけもちパターン」別の「1年間行事数」の分布を、学校段階別に図2-9~11にまとめた。なお、高校受験の影響があるため、中3生は分析から除いた。

4-1 小学生の「かけもちパターン」別に見た「1年間行事数」

小学生は、図2-9のように、「1年間行事数」が「多い」割合は、「習い事○学習塾○」「習い事○学習塾×」で3割強だが、「習い事×学習塾○」「習い事×学習塾×」では2割強にとどまる。かけもち数の多寡よりも、習い事をしているかどうか「1年間行事数」の多寡と関係しているようである。

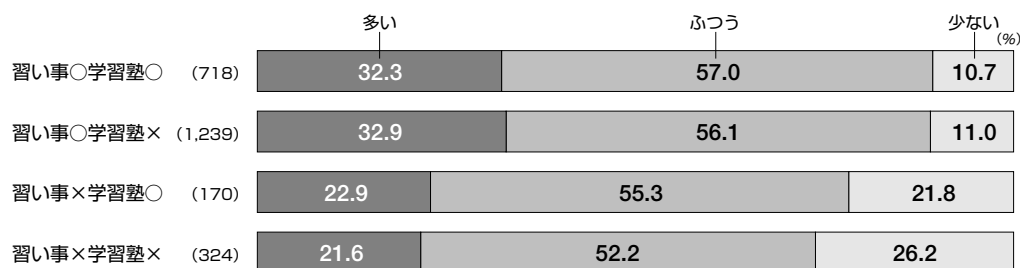
なお、学習塾については地域差がみられたことから、人口規模別にみてみたところ、「習い事×学習塾○」で「1年間行事数」の「少ない」割合は、「特別区・指定都市」が28.6%で他の人口規模の地域より多かった。「習い事○学習塾○」で「1年間行事数」が少ないのは、中学受験の影響だと考えられる（図表省略）。

4-2 中学生の「かけもちパターン」別に見た「1年間行事数」

中1・2生は、図2-10のように、「1年間行事数」が「多い」割合は、小学生と同様に、習い事をしている4パターン（「習い事○学習塾○部活動○」「習い事○学習塾×部活動○」「習い事○学習塾○部活動×」「習い事○学習塾×部活動×」）で2割前後と高くなっている。一方で「習い事×学習塾×部活動×」ではわずか4.9%である。

しかし、中1・2生でより注目すべきは「1年間行事数」が「少ない」比率の高さのほうである。つまり「少ない」比率がもっとも高

図2-9 1年間行事数（小学生、かけもちパターン別）

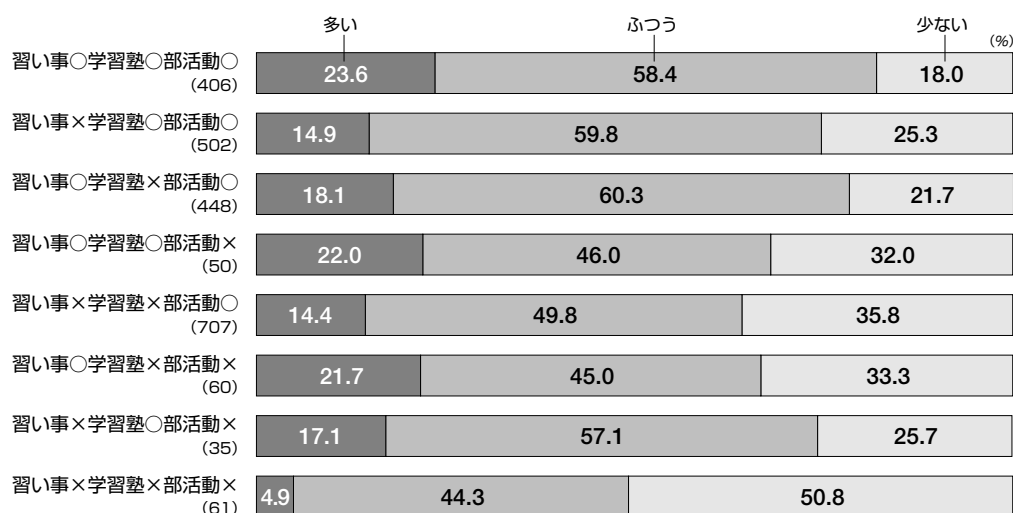


注1) 1年間行事数の3分類は、1年間にどんな行事を何日くらいするかをたずねた設問で、計11項目を経験の有無で分けて経験数の総和を求め、その数により分類した。

注2) 習い事または学習塾の設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。

注3) () 内はサンプル数。

図2-10 1年間行事数（中1・2生、かけもちパターン別）

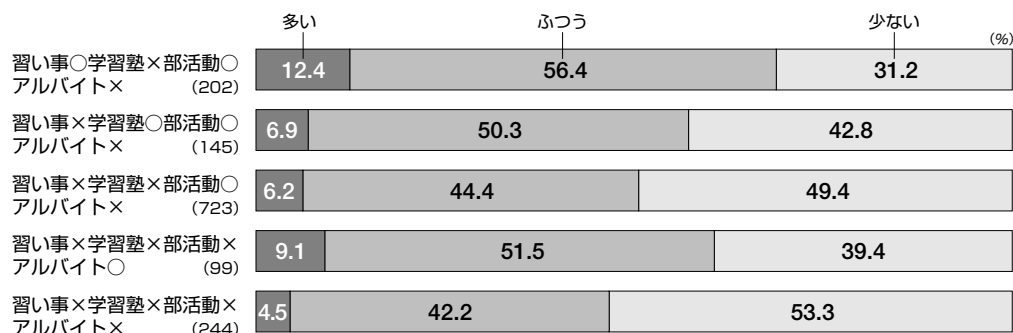


注1) 1年間行事数の3分類は、1年間にどんな行事を何日くらいするかをたずねた設問で、計11項目を経験の有無で分けて経験数の総和を求め、その数により分類した。

注2) 習い事、学習塾、部活動のいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。

注3) () 内はサンプル数。

図2-11 1年間行事数（高校生、かけもちパターン別）



注1) 1年間行事数の3分類は、1年間にどんな行事を何日くらいするかをたずねた設問で、計11項目を経験の有無で分けて経験数の総和を求め、その数により分類した。

注2) 習い事、学習塾、部活動、アルバイトのいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。

注3) () 内はサンプル数。

い「習い事×学習塾×部活動×」では50.8%と半数強にものぼっている。次いで高いのが「習い事×学習塾×部活動○」の35.8%である。

4-3 高校生の「かけもちパターン」別にみた「1年間行事数」

高校生は、図2-11のように、「1年間行事数」が「多い」比率がもっとも高いのは、「習い事○学習塾×部活動○アルバイト×」の12.4%で、習い事をしている点で小学生、中1・2生と同様である。高校生でも「1年間行事数」が「少ない」比率の高さに注目すると、「習い事×学習塾×部活動×アルバイト×」がもっとも高い53.3%、次いで「習い事×学習塾×部活動○アルバイト×」の49.4%となっている。

4-4 「かけもちパターン」と「1年間行事数」の関係

以上から、「かけもちパターン」と「1年間行事数」の関係について以下の3点が指摘できそうだ。第一に、「かけもちパターン」のかけもち数の多寡よりも習い事をしているかどうか「1年間行事数」の多寡と関係している。第二に、放課後に習い事などの活動をすべてしていないパターンの場合、「1年間行事数」の「少ない」割合が、他のパターンに比べると高く、放課後の過ごし方としても1年間の過ごし方としても活動や行事をほとん

ど経験していない子どもが一定数存在する。第三に、部活動だけをしているパターンも、「1年間行事数」の「少ない」割合が、すべてしていないパターンに次いで高い。

5. 成績や希望進学段階との関係

我が国の教育制度が入学試験などの選抜を経て高校や大学へ入学するしくみになっている以上、成績や希望進学段階には差が生じてしまう。しかし、教育の格差の問題としてそれ以上に指摘されているのは、家庭環境の違いが成績や希望進学段階の差に影響していることである。

すでにみてきたように、放課後の過ごし方や1年間の過ごし方には、家庭環境の違いが影響していた。そこで本節では、放課後の過ごし方や1年間の過ごし方の違いが、子どもの成績や希望進学段階に影響を与えているかどうかを検討していく。

5-1 1年間の過ごし方と成績の関係

小学生、中学生、高校生の成績に、学習塾を含む放課後の過ごし方はある程度影響していると考えられるが、1年間の過ごし方の違いも影響しているだろうか。「1年間行事数」と成績との関係をみていこう。

表2-4は、学校段階ごとに、「クラス内成

表2-4 クラス内成績と1年間行事数（学校段階別・1年間行事数別）

		(%)		
		上位	中位	下位
小学生 (2,461)	多い	57.1	33.9	8.9
	ふつう	48.7	40.2	11.1
	少ない	40.3	40.6	19.1
中1・2生 (2,287)	多い	49.5	33.2	17.3
	ふつう	45.1	30.0	24.9
	少ない	35.3	31.8	32.9
高校生 (1,760)	多い	50.4	34.0	15.6
	ふつう	53.7	26.2	20.1
	少ない	45.3	27.6	27.1

注1) 1年間行事数の3分類は、1年間にどんな行事を何日くらいするかをたずねた設問で、計11項目を経験の有無で分けて経験数の総和を求め、その数により分類した。

注2) 小学生および中1・2生は、「あなたの今の成績は、クラスの中でだいたいどのくらいですか」という設問を、高校生は、「あなたの中学卒業時の成績は、クラスの中でだいたいどのくらいでしたか」という設問を用い、「上のほう」「やや上のほう」と回答した子どもを「上位」、「真ん中くらい」を「中位」、「やや下のほう」「下のほう」を「下位」とした。無回答・不明は省略した。

注3) ()内はサンプル数。

績」の分布を「1年間行事数」別にまとめたものである。ただし、高校生の成績は、「クラス内成績」では在籍高校の入学難易度を統制できないため、「中学卒業時成績」を用いている。

小学生では、「クラス内成績」「上位」の比率は、「1年間行事数」の「多い」が57.1%、「ふつう」が48.7%、「少ない」が40.3%となっている。中1・2生でも同様の傾向がみられ、「1年間行事数」が増えるほど「クラス内成績」「上位」の比率が高くなっている。高校生では「中学卒業時成績」「上位」の比率では小学生、中1・2生ほどはっきりした傾向は読み取れないが、「中学卒業時成績」「下位」の比率をみると、「1年間行事数」の「多い」が15.6%、「ふつう」が20.1%、「少ない」が27.1%となっていて、「1年間行事数」の多寡と「中学卒業時成績」の良し悪しには関係がみられる。

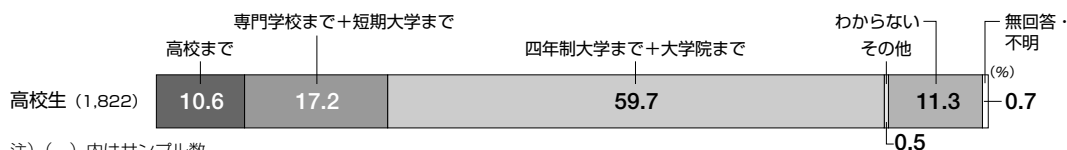
学校段階が上がるにつれて差は縮まっているものの、1年間の過ごし方として活動や行事を多く経験しているほど成績がよい傾向がみられることがわかる。

5-2 放課後の過ごし方や1年間の過ごし方と希望進学段階の関係

放課後の過ごし方や1年間の過ごし方は、小学生、中学生、高校生の希望進学段階にどのように影響しているだろうか。ここでは、希望進学段階がはっきりしてきている高校生を取り上げて、「かけもちパターン」「1年間行事数」と「希望進学段階」との関係のみをみていこう。

まず、図2-12で高校生の「希望進学段階」の分布を確認しておこう。「高校まで」が10.6%、「専門学校まで」＋「短期大学まで」が17.2%、「4年制大学まで」＋「大学院まで」が59.7%、「わからない」＋「その他」が11.3%、「無回答・不明」が0.7%となっている。

図2-12 希望進学段階（高校生）



注) () 内はサンプル数。

で」が59.7%、「わからない」が11.3%などとなっている。

次に、表2-5で、「かけもちパターン」別の「希望進学段階」をみてみよう。「4年制大学まで」＋「大学院まで」の比率は、「習い事×学習塾○部活動○アルバイト×」が86.5%でもっとも高く、「習い事×学習塾×部活動×アルバイト○」が24.5%でもっとも低い。「習い事×学習塾×部活動×アルバイト×」も49.2%と全体値より低い(図2-12参照)。ただし、「かけもちパターン」と「希望進学段階」の関係は、「かけもちパターン」の違いが「希望進学段階」に影響していると考えより、「希望進学段階」の違いが、学習塾に通うかどうかやアルバイトをするかどうかを決めるというように、「かけもちパターン」に影響していると考えたほうがよさそうだ。

では、「1年間行事数」と「希望進学段階」の関係はどうだろうか。教育の格差の問題で指摘されている家庭環境の影響も加味して、表2-6のように、「親学歴」ごとに分けて、「1年間行事数」別の「希望進学段階」の分布をみてみよう。

「親学歴」が「父母とも大卒」であれば、「1年間行事数」の多寡にかかわらず、8割強の高校生が「4年制大学まで」＋「大学院まで」の進学を希望している。しかし、「父母とも非大卒」の場合、「4年制大学まで」＋「大学院まで」の進学希望の比率は、「1年間行事数」の「多い」が43.9%、「ふつう」が47.7%なのに対して「少ない」は37.2%とやや低い。「親学歴」が「父母とも非大卒」の場合は、学歴差に加えて1年間の過ごし方の違いも希望進学段階に影響を与えていることがわかる。

表2-5 希望進学段階（高校生・かけもちパターン別）

	(%)		
	高校～短期大学まで	四年制大学まで+大学院まで	わからない
習い事○学習塾×部活動○アルバイト× (205)	23.9	63.9	12.2
習い事×学習塾○部活動○アルバイト× (148)	5.4	86.5	8.1
習い事×学習塾×部活動○アルバイト× (740)	28.4	60.5	11.1
習い事×学習塾×部活動×アルバイト○ (102)	59.8	24.5	15.7
習い事×学習塾×部活動×アルバイト× (248)	34.3	49.2	16.5

注1) 習い事、学習塾、部活動、アルバイトのいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2) 「高校～短期大学まで」は、「高校まで」+「専門学校まで」+「短期大学まで」の%。「その他」、無回答・不明は省略した。
 注3) ()内はサンプル数。

表2-6 希望進学段階（高校生・親学歴別・1年間行事数別）

		(%)		
		高校～短期大学まで	四年制大学まで+大学院まで	わからない
父母とも大卒 (532)	多い	6.8	86.4	6.8
	ふつう	11.2	82.2	6.6
	少ない	7.0	85.5	7.5
父母とも非大卒 (775)	多い	41.5	43.9	14.6
	ふつう	39.5	47.7	12.8
	少ない	46.6	37.2	16.2

注1) 父親、母親のそれぞれについて、大学や短期大学を卒業している場合を「大卒」、そうでない場合を「非大卒」とした。
 注2) 「父非大卒・母大卒」「父大卒・母非大卒」は、ケース数が少ないため省略した。
 注3) 習い事、学習塾、部活動、アルバイトのいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注4) 「高校～短期大学まで」は、「高校まで」+「専門学校まで」+「短期大学まで」の%。「その他」、無回答・不明は省略した。
 注5) ()内はサンプル数。

6. まとめ

本章では、教育の格差の問題として、放課後の過ごし方や1年間の過ごし方といった「文化の格差」も、子どもの将来を規定する重要な要因となりうるのではないだろうかという問題設定から、小学生、中学生、高校生の放課後の過ごし方の「かけもちパターン」や、1年間の過ごし方の「1年間行事数」の状況やその背景、両者の関係、さらには、両者と成績や希望進学段階との関係について検討してきた。以上の分析から明らかになった重要な知見と課題を3点提示して本章のまとめとしたい。

① 家庭環境の影響

第2節、第3節の分析から、「かけもちパターン」「1年間行事数」とともに「親学歴」の

影響を受けていることが明らかになった。教育の格差の問題として、家庭環境の違いが論じられてきているが、家庭の経済的な格差に加えて、「文化の格差」についても検証し、教育の格差の一側面として論じていくことが望まれる。

② 部活動の役割

第4節の分析から、「1年間行事数」で「少ない」割合がもっとも高いのは「かけもちパターン」ですべてしていないパターン、次いで部活動だけしているパターンであることが明らかになった。家庭環境の違いを考慮した場合、部活動が少なくとも1つの活動経験、または1つの放課後の居場所を提供する機会になっていると考えられる。部活動は、地域との連携・移行を模索する動きもあるが、次期学習指導要領で教育課程との関連に留意す

ることが求められており、このような機会の確保の観点からの役割の見直しの検討が望まれる。

③ 文化的再生産

第5節の分析から、「親学歴」が低い場合に、「1年間行事数」の違いが「希望進学段階」に影響していることが明らかになった。かつてフランスの社会学者ブルデューが、親の社会的な地位が子どもに引き継がれるのは、経済的な裕福さよりも文化的な経験やそれを通して身につける振る舞い方や習慣によるとする文化的再生産という考え方をデータ

に基づいて論じた¹⁾。日本では、高校や高等教育への進学率が上昇していた時期にはデータ上ははっきりととらえることができなかったが、高等教育への進学率の上昇が落ち着きを見せ始めた昨今、文化的再生産という観点から教育の格差の問題を改めて検討することが望まれる。

1) 文化的再生産の考え方については以下に詳しい。ブルデュー、1990、『ディスタンクシオン I・II』藤原書店、ブルデュー・パスロン、1991、『再生産』藤原書店。